日本中國學會報　第七十一集
二〇一九年十月十二日　發行　抜刷

孫海波の清代學術思想研究

林　文孝

孫海波の清代學術思想研究

林　文孝

はじめに

孫海波の名は、通常は甲骨學者として記憶されているであろう。「現行の最も權威ある甲骨文字字形表」[1]と評される『甲骨文編』の舊編[2]編者であり、中國社會科學院考古研究所による改編本[3]においても、同書「編輯序言」（一頁）によれば、實質的編纂作業は孫が進めた。いわばこれらの編纂當時、孫は甲骨學の基盤的枠組みを提供するような存在であった。しかし、私のような門外漢から見る限り、現在では、羅振玉や郭沫若の何分の一ほども孫の名は知られない。その要因の一つは、孫の成果の陳腐化に求められそうである。たとえば鈴木敦は『甲骨文編』に數々の問題點を指摘し、その改善の方策を提案している[4]。

いっぽう、孫海波は清代學術思想（以下適宜「清學」とも稱する）も研究していた。一九四〇～四二年に八篇の學術的文章が集中的に發表され、一九七一年、香港發行の資料集[5]に影印收錄された。ところが、この分野の研究史でも孫の存在感は希薄である。

本稿の主たる興味は次の二點にある。第一に、基本的には甲骨學者であった孫海波が、いかなる要因によって清學研究に取り組むに至ったのか。第二に、孫の清學研究に對して與えられるべき應分の評價とはどのようなものか。

第一點についてのごく單純な豫想は、甲骨學の基礎をなす文字學の發達が清朝考證學の主要成果だから、というものである。しかし、孫海波の清學研究の重點は、文字學・小學よりも宋明理學系の思想家や哲學思想的內容にあると見受けられる。したがって、ほかの要因も考える必要があり、そのためには一九四〇年代初頭に至るまでの孫の研究狀況を確認すべきである。

以下、第一節では、知られることの少ない孫海波の生涯について略傳資料を翻譯し、若干の補足を行う。第二節で、孫の清學研究の概略を紹介するとともに、今日的な水準から見た特徵を指摘する。第三節で、これらの研究の背景に孫の經歷が關係していることを述べ、他の要因についても補足的に指摘する。最後に、本論をまとめるとともに殘された課題に觸れる。

一　孫海波の略傳

孫海波について情報量の十分な傳記的記述は少ない。私が見る限り、二點だけを擧げうる。一つは、孫の鄕里である河南省潢川縣で編纂された『潢川縣志』（以下『縣志』と稱する）の略傳[6]。もう一つは、河南大學で孫にも教えを受けた甲骨學者、郭勝强による比較的詳細な記述[7]。

ここでは前者全文を日本語譯して揭げる。中華人民共和國における新地方志という性格上、縣政府の把握している個人情報が反映されているものと期待できよう。加えて、日本での所藏が少ない文獻なので、資料紹介の意味もある[8]。文中の機關名や職名、著作名等はなるべくそのまま記した。誤りと思われる記述もあるが、顯著な場合のみ注で指摘した。

孫海波（一九〇九～一九七二）[9]、孫銘恩の名を用いたこともある。著名な甲骨文專門家。潢川縣の人。少年時代に潢川小學で勉强したときから古文字に興味を感じていた。一九二八年に潢川省立第七中學を卒業、省都開封に赴いて補習授業を受け、一九二九年に北平の燕京大學國文專修科に合格入學した。

一九三一年八月、孫海波は北平師範大學研究所に合格し、容庚先生の指導のもと、甲骨文・金文研究の作業に從事した。その年、彼は「說弇」、「釋采」、「釋眉」等の論文を次々に發表し、甲骨文および商代の歷史地理について考證解釋した。一九三二年に論文「說十二月[10]」を發表し、商代の曆法について檢討を行った。一九三四年、甲骨文字字典『甲骨文編』を編纂出版した。本書は全部で一四篇、當時にあって古文字學者の考證を經て共通認知されていた甲骨單字一〇〇六箇を收錄し、甲骨文研究を前進させた。一九三四年七月、孫海波は研究院を卒業し、招聘されて中央研究院歷史語言研究所助理員を務め、引き續き甲骨文、金文および訓詁學、音韻學等を研究した。この間、「卜辭曆法小記」（一九三五年一月）、「讀王靜安先生古史新證書後」（一九三五年六月）、『古文聲系』（一九三五年一月）等を立て續けに發表。中でも『古文聲系』は彼の最初の專門書である。

一九三五年七月、孫海波は招聘により北平師範大學國文系講師に任じ、同時に東北大學中文系教授と北平研究院歷史學會編輯を兼任した。一九三四～一九三七年には招聘に應じて『河南省通志稿』の編纂に參與し、「文物志・吉金編」主編の責任を負った。この期間に發表した論著には「卜辭文字小記」（一九三五年一二月）、「甲骨文中說文之逸文」、「卜辭文字小記續」（一九三六年）、「釋呂」、『簠室殷契徵文校錄』（一九三七年）、『新鄭彝器』、『濬縣彝器』（一九三七年）、『魏正始三字石經集錄』（一九三七年考古學社專集第一七種）、『古器物拓片殘集』（一九三七年）がある。一九三七年七月、中國大學中文系教授として招聘された。

一九三七年一二月、日本は北平に「中華民國臨時政府」を成立させ、一九三八年八月から一九四二年まで、孫海波は日本傀儡政權下の東方文化委員會[11]で『四庫全書』金石部分・雜物部分の提要考證を行う[12]とともに、國學書院第二院講師を兼任、その間に日本人岩間德野[13]が河南安陽で古物發掘するのを案內した。一九四二年一二月、日本傀儡政權下の北平師範大學代祕書長に任じ、その後ふたたび北平中國大學中文系教授、一九四五年に日本が降伏して後もそのまま一九四六年七月まで中國大學中文系教授を務めた。

『甲骨文錄』（一九三八年）、『河南吉金圖志賸稿』（一九三九年）、『誠齋殷墟文字』（一九四〇年）および「評殷墟書契續編校記」、「評甲骨地名通檢」、「評甲骨叕存」、「評殷契遺珠」、「評鐵雲藏龜」、「評金璋所藏甲骨卜辭」（一九四〇年）を次々に發表した。

一九四六年七月から一九四八年七月まで、孫海波は長白師範學院文史系教授兼系主任を務めた。一九四六年夏、孫海波は母の葬儀のため潢川に歸り、八月一四日に潢川專署大禮堂にて甲骨文をテーマに學術報告を行った。一九四八年八月から一九四九年一二月まで、雲南大學中文系教授兼昆明五華學院歷史系主任を務めた。雲南解放後も雲南大學中文系教授に留任した。

一九五一年一月、孫海波は華北大學政治研究院に入って學習し、一一月に西南師範學院圖博科に配屬されて教授兼主任を務めた。一九五四年八月、新鄕師範學院歷史系教授に轉任、一九五五年八月に開封師範學院（現河南大學、引用者注）歷史系教授兼院學報および『史學月刊』の編集委員に轉任。一九五七年、「右派」に區分され、「職務取消、勞働矯正」の處分を受けた。一九六一年、河南省歷史研究所研究員に轉任、一九六三年六月に「右派」のレッテルは剥がされた。「文化大革命」の期間には、何度も批判闘爭を蒙ったが、一九八一年一〇月に、河南師範大學が再審査し是正して、「右派」との結論は取り消された。

建國後、彼が發表した論著には「從卜辭試論商代社會性質」（一九五六年）、「公元前十二世紀周族對外的擴張」、「介紹甲骨文」（一九五七年）、「許愼和『說文解字』」（一九六一年）、修訂版『甲骨文編』（一九六五年）がある。

一九七二年二月二四日、孫海波は開封で病死した。享年六三歲。生前に、所藏の考古・甲骨文・金文・歷史等各類の書籍一七〇〇冊あまり、書畫二四幅、文物圖面四一六枚、甲骨文殘片および古錢等一〇七枚（片）を、すべて河南省歷史研究所に寄贈した。

郭勝强の記述は、甲骨學上の業績內容、河南大學との關係などについては格段に詳しいものの、履歷の核心部分は『縣志』と共通の表現が多く見られる。これらを通じて見て取れる孫海波の生涯の特徵は、甲骨學という新興學問分野の研究に身を投じて早年には華々しく活躍しながら、日本による中國侵略、反右派闘爭や文化大革命といった政治史的狀況に翻弄されて不遇のうちに幕を閉じたということになろう。[14] 一九六五年版『甲骨文編』の編者として正式に掲げられない理由も、當時の政治狀況から類推できそうである。

さて、以上の略傳資料の中で十分に紹介されていない部分がある。一つは、一九三〇～四〇年代の孫海波の研究對象が、中國古代文化全般にまで廣がっていたこと。もう一つが、本稿の主題である清學研究である。本節では前者の情報を私の把握する限りで補っておこう。「國語眞僞攷」（『燕京學報』第一六期、一九三四年）、「申虞書禋于六宗義」（『東亞論叢』第五輯、文求堂、一九四一年）[15]、「屈子疑年」（『中國留日同學會季刊』第四號、一九四三年）、「論秦與儒敎之關係」（『中國學報』第一卷第四期、一九四四年）、「西漢今古文之爭與政治暗潮」（『中國學報』第二卷第一期、同第三期、同第四期（以上、一九四四年）、第三卷第一期（一九四五年）、同第二期（一九四六年）。加えて、文字學關連では次の書物が日本で出版されている。『中國文字學』（文求堂書店、一九四一年）。

二　孫海波による清代學術思想研究とその特徵

本節では、孫の略傳に補うべき內容として、清學研究の成果ならび

に關連活動の概要をまとめ、注目すべき特徴を指摘する。

まず、「はじめに」で觸れた八篇の論文を取り上げよう。これらはすべて『中和月刊』に發表された。同誌は一九四〇年に、「中華民國臨時政府行政委員會」祕書長の職にあった瞿宣穎（一八九四～一九七三）が創刊した月刊誌であり、中國の自己反省と自救を訴えつつ、學術文化の紹介に努めていた。[16] 主要な執筆者には周作人（一八八五～一九六七）、錢稻孫（一八八七～一九六六）[17] といった知日家が名を列ねる。注(16)に擧げた桑兵の解説を含む北京圖書館出版社影印版（全一二冊）がある。孫海波は第一卷第一期以後七期連續して「海波」名義で「～學記」と題する論文を載せ、一九四二年には「孫海波」名義で劉逢祿に關する一文を寄せた。掲載順に番號を付し、卷號のあとに原載誌、影印版それぞれの冒頭頁數、注(5)に擧げた存萃學社編資料集での頁範圍を付記するとともに、表題の人名が字や號によるため、對象人名とその生卒年、本籍記述を適宜補った。①～⑧の本稿での引用・參照は存萃學社編書による。

①「凌次仲學記」一（一）、七八頁、第一册九四頁、二四七～二六四頁。凌廷堪[18]（一七五五～一八〇九）、安徽歙縣人。

②「朱九江學記」一（二）、八一頁、第一册二八七頁、四一一～四二二頁。朱次琦（一八〇八～一八八二）、廣東南海人。

③「莊方耕學記」一（三）、七三頁、第一册四八一頁、一二五～一三六頁。莊存與（一七一九～一七八八）、江蘇常州武進人。

④「崔東壁學記」一（四）、五二頁、第一册六六二頁、二三四～二四三頁。崔述（一七四〇～一八一六）、直隸（現河北省）大名府魏縣人。

⑤「程讓堂學記」一（五）、六二頁、第二册七二頁、一五四～一六七頁。程瑤田（一七二五～一八一四）、安徽歙縣人。

⑥「朱止泉王白田學記」一（六）、七五頁、第二册二六九頁、七八～九二頁。朱澤澐（一六六六～一七三二）、江蘇揚州寶應人。王懋竑（一六六八～一七四一）、寶應人。

⑦「張起菴學記」一（七）、五三頁、第二册四四五頁、二四～三八頁。張沐（一六二〇～一七〇二）[19]、河南上蔡人。

⑧「書劉禮部遺書後」三（八）、六頁、第八册五五四頁、三三六～三四〇頁。劉逢祿（一七七六～一八二九）、江蘇武進人。

これらの文章が資料集への再錄により讀者を得ているのに對し、あまり知られていないであろう孫海波の仕事を一つ補っておく。清代の史學者、楊椿の文集『孟鄰堂文鈔』一六卷、嘉慶二五年跋刊本の影印出版である。[20] 出版地は不明だが封面に「孫氏影印」とあり、卷末に一九四二年の「潢川孫海波」後記がある。日本では現在、國立國會圖書館關西館アジア書庫等に所藏されている。この後記を一種の研究成果と見なして通し番號を加えておく。

⑨「孟鄰堂文集後記」（文中記述による假稱）、『孟鄰堂文鈔』卷末に白口單魚尾、左右雙邊無界、毎半葉十行、毎行一八～二一字にて二丁オまで。楊椿（一六七六～一七五三）、江蘇常州武進人。

以上が、私が本稿で取り上げる限りでの、孫海波による清學研究の成果である。[21] 他の雜誌媒體にまで十分な調査が及んでいないが、①～⑧を一つのまとまりとして捉え直すこと自體今までなされていないと思われる。これらに共通する特徴は、私見では、マイナーな對象への注目と哲學思想への關心の二點である。

孫海波の研究對象がマイナーであることには疑いがない。張沐と楊椿は明らかに忘却に瀕していた人であり、孫海波の意圖もそのような存在の顯彰にあることが明言されている。[22] また、他の諸人も、無名で

はないまでも、ビッグネームではありえない。

これらマイナーな存在に對して向ける關心のあり方も特徴的である。孫海波本來の專門というべき文字や音韻の話題はほとんど見られず、程瑤田の著作一覽紹介で『果贏轉語記』の書誌的內容に言及する⑤（一六一頁）のがほとんど唯一の例外である。そのかわり彼がほぼ一貫して關心を向けるのが、「義理」すなわち哲學的・倫理學的含意である。孫の關心の焦點は哲學思想にある。文字學や音韻學においてこそ清朝考證學が長足の進歩を遂げたことを思えば、孫の關心のあり方は特異に見える。

以上のように、清學上の比較的マイナーな存在に對して、非主流的な關心の向け方をしたとすれば、研究史においては獨特の地位を占めてもおかしくない。しかし、現狀では必ずしもそうではなく、その理由も容易に理解できる。ほぼ同じ對象について、「義理」重視という類似した視角から取り上げた重要な先行研究が存在するからである。錢穆（一八九五～一九九〇）『中國近三百年學術史』（商務印書館、一九三七年初版）[23]がそれだ。

錢穆が同書で取り上げているのは、④の崔述、⑦の張沐、⑨の楊椿以外の全員である。[24]そして、孫海波は現に錢穆の指摘にも言及している。[25]さらに、孫の「義理」への關心が前面に出た①淩廷堪や⑤程瑤田についての議論などは、淩の「以禮代理」說の淺薄さを批判し、戴震をも加えた三者の比較において程に高い評價を與えるという構圖そのものが錢と共通しており、同じ表現を襲用するところさえある。[26]したがって、先後關係でも內容の獨創性においても孫は劣位にある。淩廷堪の主張を清代思想史に再定位した張壽安による先行研究紹介は、錢と孫との位置關係を反映した典型例である。[27]

では、孫海波の清學關係の文章は、ことごとく二番煎じにすぎないのだろうか。そうではなかろう。私見では、程瑤田に關する論述など、錢穆が引用を次々に列ねては簡單に概括するところを、孫海波は宋儒の說との關係や王陽明・劉宗周との類似性などといった論點について考察を加えており、より周到な議論たり得ていると思われる。また、⑧の劉逢祿の著作についての版本學的整理は、その後の研究の基礎という評價を得ている。[28]そして、より重要な意味をもつと思われるのが、一貫してマイナーな存在に目を向ける關心のあり方である。⑦と⑨における忘れられた學者・思想家の發掘はその典型例と位置づけられよう。

楊椿は明史・一統志・國史三館纂修を兼ね、のち『明鑑綱目』編修に携わった史學者として紹介されている。そして、彼への關心は、同樣に明史への造詣が深かった萬斯同（一六三八～一七〇二）への顯彰意識と一體のものであった。すなわち、萬の『石園集』刊行を志しながらも遂げられない狀況の中で、[29]「予悲夫學人窮畢生之力所爲文字、往往不傳、傳矣、而又未能廣（私は、學人が畢生の努力を盡くして書いた文章がしばしば傳わらず、傳わったとしても廣まらないという事態を悲しく思う）」との感慨から、まずは刊刻されながら流傳の少ない楊椿の文集を影印出版するのだという（⑨「孟鄰堂文集後記」二丁オ）。

ここでの孫海波の姿勢は、一貫してマイナーな存在に目を向けた「學記」シリーズに通ずるものがある。そして、⑦は、張沐についての最初の學術研究である。引用・出典の表示等に難點はあるが、現在でも最重要の論文といえる。[30]とりわけ、なぜ張沐がマイナーな存在たらざるを得なくなったのか、その要因にまで考察を及ぼした點で出色である。

夫以起菴在當時聲譽之隆、而交游亦廣、自夏峰集習齋年譜偶一及之之外、其餘諸家、無有能道之者、何則。蓋康熙之世、朱學盛而王學浸微。治朱學者、見起菴之提倡心學、方且痛惡之不暇。烏肯細讀其書。洎乎乾嘉、考据之學興、義理之學、人所卑視、卽朱子已爲諸家交詬之的、更無人肯讀起菴之書矣。而河南人士、自張敬菴而後、不惟無人能講義理之學、卽考据之術、亦渺有通者。鄉邦人士猶然、外人更無從知之矣。是以起菴之學、雖行于當世、不旋踵而卽湮沒無聞焉。

そもそも張沐の生前、聲望があれほど高く、交遊もまた廣かったというのに、『夏峰集』や『習齋年譜』にたまたま言及される以外、その他の諸家で彼についてきちんと語った者がいないのは、なぜなのだろうか。康熙の時期、朱子學が盛んで王學はしだいに衰えていた。朱子學に取り組む人たちは、張沐が心學を提唱したのを見て、激しい憎惡を向けることにのみ忙しく、その書物を丁寧に讀み込むことなど思いもよらなかった。乾隆・嘉慶の時代になると、考證學が勃興し、義理の學は人々から蔑視されるようになって、朱子ですら諸家が非難を加え合う標的となっており、張沐の書物を甘んじて讀もうとする人など、それまで以上にいなくなってしまった。そして、河南の人士は、張伯行以後、義理の學を講じることのできる人がいないばかりか、考證の學問についても、やはり理解者に乏しいありさまであった。鄉里の人士ですらそうなのだから、外地の人々はいっそう知るよしもなかった。そのため、張沐の學は、その當時には行われたのに、その後急速に埋もれて忘れ去られてしまったのである。(⑦三七頁)

この記述には、孫自身の「義理の學」への關心もまた垣間見える。實際、本論における張沐の思想變遷の記述は、宋明理學全般への深い理解を背景にしたものと評しうる。

このように、マイナーな存在に一貫して注目し、それらを忘却から救おうとする姿勢と、考證よりも義理への關心を前面に出す關心のあり方が、孫海波の清學研究の特徵といえるだろう。同樣の視角をもつ研究にとっては、錢穆ほどの重要性は認めがたいとしても、孫にも汲むべき點は見いだせるものと思われる。

三　孫海波の關心の背景

孫海波はなぜ清學への關心を抱き、無視しがたい數の文章を發表するにいたったのか。しかも、その關心の內容が、孫の本業というべき甲骨學研究から遠く離れているように見えるのはなぜなのか。この問題を、孫海波の經歷という文脈の中で問うことにしよう。最大の手がかりとなるのが、一九三八年から日本傀儡政權下の文化事業に參與したとの『縣志』略傳の記述である。本節ではこのことを中心に檢討し、それだけでは說明の付かない要因について補足する。

當該事業は、最初は一九二三年、日本單獨の「對支文化事業」として法整備され、その後日中共同の「東方文化事業」へと變更されたものである。[31] 運用金にはおもに義和團事件賠償金が充てられた。この事業の一環として、一九二七年に北京人文科學研究所が開設され、その中心業務とされたのが續修四庫全書總目提要（以下、適宜「續修提要」と略稱）編纂事業であった。[32] ところが、一九二八年、濟南事變を受けて中國側委員が總退出し、事業の繼續が困難となった。このとき編纂事業の立て直しを託されたのが、當時北京で『文字同盟』誌を發行し學術的交友が廣かった中國文學者、橋川時雄（一八九四～一九八二）で

ある。[33] 橋川は一九三三年一二月に東方文化事業總委員會總務委員署理に就任、以後、未完のまま一九四五年に中國側に接收されるまで、續修提要編纂事業の實質的責任者を務めた。

接收された提要原稿は北京で保管され、その後影印出版された。中國科學院圖書館整理『續修四庫全書總目提要（稿本）』全三七册＋索引卷（齊魯書社、一九九六年）（以下『稿本』と稱す）である。また、東京の東洋文庫には關連の簿册が『續修四庫全書總目提要撰稿底簿　研究所』・『同　書目』（貴XI－三－B－四二）（以下、注(34)に掲げる吳格論文に倣い『編纂資料』と稱す）と題して收藏されている。[34]「研究所」部分は提要原稿の受付記錄、「書目」部分は各執筆者への割當書目兼執筆有無のチェックリストである。

ところで、橋川時雄は一九三四年、研究囑託の增聘を進めてスタッフの若返りを圖ったことが知られている。そして、孫海波の名もこれら增聘研究員の一人として先行研究では言及される。[35] しかし、孫の略傳では事業參加は一九三八年とあり、おそらくそれが正しい。一九三七年に日中戰爭が勃發したことに伴う立て直し策として再度人員補充の必要があったのだろう。[36]

本稿は、孫海波が一九三八年に研究囑託に採用されたとすれば、そこでの提要執筆作業が一九四〇年代に至るまでの彼の學問に深甚な影響關係をもったのではないかと想定する。そのことを檢證するために、孫の提要執筆狀況は有用な材料である。

從來は孫海波の擔當範圍は「甲骨文、子部儒家類」などとされた。[37] これに對し、橋川時雄が一九四〇年に興亞院に提出した計劃書にもとづき今村與志雄が紹介している各部類の提要執筆者一覽表は、四部分類の枠組みでもう少し詳細なデータを示しており、孫海波の名は次の各類に見える（記號は今村に從ったもので、「＊」は主纂（主編）を務めたもの、「○」は整理工作者を意味する）。經部では、易類、禮類、群經總義類（＊○）、四書類、小學類、石經類（＊○）。史部では傳記類と金石類。子部では儒家類（＊○）、天文算法類、雜家類、雜纂類。以上である。[38]

子部儒家類への關與が意外なほど深いことが見て取れるだろう。また、執筆範圍は比較的廣範である。そこで、現存する提要稿と關連資料から實態を確認することにする。

前掲『稿本』第一册の「提要撰者表」に依據して、第一一册三八九頁上～第一二册四七四頁上、第三七册四一三頁上～四四〇頁下、同五九四頁下～同六二一頁上を取りあえず孫海波執筆分とする（以後「認定範圍」と稱す）。認定範圍內の提要は、その大多數が右肩上がりで縱長の特徵的筆跡で書かれ、他の出版物における孫名義の序跋の筆跡とも一致する。これらと『編纂資料』との突き合わせを行い、未執筆書目をも材料とする。以上のデータをExcelブック形式のファイルに入力し、各種の並べ替え・集計を行った。

まず、甲骨學およびそれと關連する石經、金石分野の狀況に觸れておこう。孫海波自身がかかわった書物の序文や識語、『中和月刊』の「書林偶拾」欄に「海波」・「波」名義で書かれた書評[39]などが當該時期の學術成果だが、これらと同一對象にかかわる孫海波執筆提要が複數存在し、それらの間にはほぼ必ず同一表現、同一論旨の轉用が見られる。このことが示すのは、孫にとって提要執筆は、本來の研究活動と別事ではなかったということである。ときには自著の提要を執筆してその意義を自贊してさえいる。[40]

では、同樣の關係が淸學研究についても成り立つかというと、そ

うではない。そもそも書目のレベルで、孫海波が論文で論じた著者の著述をほとんど擔當していない。例外は、程瑤田の著作七種、張沐の著作として經部四書類の二種を擔當していることだが、張沐について論文で分析した思想的著作の提要は王孝魚がすでに執筆していた。[41]また、程瑤田著作の提要で⑤「程讓堂學記」と內容が重なるのは、『論學小記』（『稿本』一二―一一五頁）のみである。

ここから、清學研究に關しては、孫海波の中で續修提要執筆との直接的重なりはほとんどないことがわかる。しかし、それは、兩者の無關係を意味しない。むしろ、より深いレベルでの關連を想定することも可能である。本稿では、彼の書いた提要の分類上の分布からその關連を主張したい。分類は『稿本』索引卷の用いた部類による。四部分類に叢書部と方志部を加えたものである。これは、續修提要事業で實際に用いられた北京人文科學研究所の分類表に基づきながらも多少改變されている。また、個々の書物の分類も、『編纂資料』とは異なることがある。したがって、孫海波ら當事者の分類意識とは多少ずれるが、大體の傾向を示すには十分であろう。

表　孫海波執筆提要（認定範圍分）の分布

部	篇數	備考
經	386	四書 37 小學 267（內音韻 156） 石經 14
史	111	傳記 21（內外國人傳 13） 金石 49（甲骨文含む）
子	401	儒家 91 雜家 249 說叢 39
集	63	別集 44 （時代はすべて清。朝鮮の著者 26 含む）
叢書	2	
方志	0	
計	963	

認定範圍の提要篇數は九六三である。『稿本』索引卷に引き當てて部ごとの篇數を集計し、類レベルで注目される分布を備考に記す。

結果は「表」に示したとおり。經部小學類は當然のことながら多く、史部金石類に含まれる「甲骨文」も、續修提要事業本來の分類では經部小學類に屬する。しかし、これに迫る數を示すのが子部雜家類であり、子部儒家類も相當の比重を占めている。

本文から整理したデータに目を轉じると、撰者の朝代の延べ數としては、『四庫全書』續修という性格上當然ではあるが、清が六二一と壓倒的に多い。朝鮮の九六も特筆される。記されていない一四一例の中では、劉師培以下、近人が多くを占める。

『編纂資料』と突き合わせるとさらに次のようなことがわかる。

第一に、「研究所」簿册の「收稿日期」は一九三八年七月一九日から九月一三日まで、簿册內に記された四八種[42]はすべて認定範圍內に提要が存在し、「研究所」の分類ではすべて「經部石經類」と「經部小學類甲角之屬」と記される（『稿本』の分類ではほぼ「經部石經類」と「史部金石類」に相當）。

第二に、「書目」に記載されているが認定範圍に提要が存在しないものが多數ある。それにはいくつかの場合がある。一つ目は、「書目」において事後的に抹消されている場合。他の執筆者に依賴濟みであることがあとから判明したケースなどがそれである。[43]二つ目は、認定範圍外の執筆者不明提要として收錄されている場合。該當事例は『稿本』三五―八二九～八四一頁、および三七―三七七～七七五頁の範圍內で計三一篇あり、筆跡の面でも、認定範圍の大多數と一致するものが存在する。三つ目は、書かれたのに失われた場合。「書目」簿册に「已撰」印があるにも關わらず『稿本』に該當書名が見えないの

は約六〇例ある。ただし、この場合には、稿本は失われても、その後の編纂段階である油印打字本[44]には含まれている例もあるかもしれない。四つ目が、そもそも書かれていないと思われる場合。該當は五〇二例。ちなみに、「書目」に記載された書籍の數は、重複や取消しも含めると一三七九種に上る。全體の分類傾向は記載不十分のため示しがたいが[45]、重複を無視して「書目」簿册の部類表示により單純計算すると、「金石」の二〇九種以外に、「儒家」一〇五種、「儒家・雜家」九〇種、「雜家」一八四種、「雜考」（正確には「子部雜家類雜考之屬」であろう）二八一種を數える。「書目」第一册の終盤から第二册冒頭にある「金石」や、第二册後半の「儒家」、「雜家」、「雜考」、そして最後にまとめて加えられた劉師培著作六三種（未分類）は未執筆率が高い。

第三に、「書目」簿册に該當のない提要稿が、認定範圍内に二一〇篇存在する。經部易類は、「書目」には全く登場しないのに二〇篇が認定範圍内にある。このほか注意されるのは、朝鮮の書物九八種で、分類は多岐にわたる。一九四〇年七月に橋川時雄が朝鮮圖書視察をした際、張壽林（一九〇七～?）、謝國楨（一九〇一～一九八二）、班書閣（一九〇〇～?）、孫海波が研究員として同伴しており、そのときの調査の產物であろう[46]。朴趾源『燕巖集』（『稿本』三七－六一七頁）など儒者の別集も擔當している[47]。

以上のデータは、橋川の事業計畫における孫海波の位置をおおむね裏づけるとともに、さらに多くのことを示していると思われる。

孫海波の擔當範圍は、時系列的に擴大したのであろう。「研究所」簿册は、孫が採用された當初と思われる一九三八年の短期間しか記述がないが、石經と甲骨文という孫本來の專門性に卽した擔當であった。ところが、「書目」では、「研究所」記載との重出を含む「石經」類と「經部小學類甲骨之屬」との間に、部類表示はないものの「經部小學類音韻之屬」と見るべき割當もなされている（「書目」第一册一丁ウ～四丁ウ。なお、簿册用紙は毎半葉一二行で、原則一行一種の書籍が記載される）。そして、以後、書目は逐次的に追加されていった形迹がある。音韻關係が一箇所にまとめてではなく、飛び飛びに登場するのである。その錯綜した記述の中に、未執筆分を含む大量の子部文獻割當が確認できる。まずは「雜考」の大量割當があり（第一册八丁ウ～二〇丁オ）、「雜家」（二六丁オ～三三丁ウ）、「儒家」（三三丁ウ～三八丁オ）[48]といったまとまりが見いだせる。「書目」第二册になって「四書」が登場し（第二册一丁ウ～四丁ウ）、續いて「儒家・雜家」の割當が八丁オまで記される。分類の詳細を執筆者に丸投げしたかたちである。そして、「書目」の最後で劉師培の大量の著作が一氣に割當てられたほか、書目の外でも執筆割當が行われた[49]。典型的なのが一九四〇年の朝鮮圖書調査である。

この擴大に與って力があったのは、割當を差配した橋川時雄からの信頼であろう。一九四一年發表の「北京の學藝界」という文章で、橋川は以下のように孫海波を紹介している。

> 孫氏（孫海波、引用者注）にいたっては甲骨文字に關する多くの著述を公刊してゐるばかりでなく、古音學の研究にも及び、漢學宋學を渾然融合した學養にまで發展せしめむと努めて居る。（注(33)前掲高田編書、一六七～一六八頁）

こうした志向を理解したから橋川が儒家類を任せたのか、それとも儒家類を任されたから孫のうちにこうした志向が芽生えたのかは難しい問題だが、孫の仕事ぶりを橋川が信頼することなくして委囑範圍

の擴大はなかっただろう。[50] そして、「書目」の累加の推移からは、「雜考」という考證學者の劄記を多く含む分野の擔當が大きなステップであったように見受けられる。ここから、孫が從來學界で確立してきた專門性を越えて、雜なる範圍へと擔當分野が一氣に擴大した。その延長線上に、子部儒家類や經部四書類といった性理學的色彩が強い著作群についても依頼されるに至ったのではあるまいか。こうした擴大は、學者のレベルや學風の違いを越えた清學の全體像について、包括的認識をもたらしたであろう。

かくして、續修提要事業において清代の學者の廣範な文獻を手がけ、子部儒家類の主纂・整理工作を通じて義理の學への理解を深めたことは、一九四〇年ごろの孫の清學研究にとって不可缺の背景をなしたにちがいない。埋沒していく優れた知性への哀惜と、性理學への深い理解が、孫の清學研究を特徴づけているといえよう。

以上述べたことは、『中和月刊』發表論文の多くに當てはまるが、一篇だけ例外がある。張沐を扱った⑦「張起菴學記」である。ここで孫海波は、張沐に從學した黄本訥や李經世といった人物の遺書を見られずにいることを嘆き、[51]「即起菴著述、亦求之十年而始獲一讀（張沐の著述ですら、十年もの探求の後にやっと一讀することができたのである）」（⑦三七頁）と述べている。だとすれば、孫が張沐の著述を求め始めたのは遲くとも一九三〇年頃となり、續修提要事業にかかわる以前に關心をもったことになる。

では、その關心は何に由來するのか。單純ではあるが、河南人としての鄕土意識だと推測する。『縣志』略傳にあるとおり、「張起菴學記」に至る十年の間に、孫海波は河南通志編纂事業で成果を上げており、そのことは自身の鄕土意識をいっそう高めたであろう。[52]

本節を結ぶにあたり、孫海波の清學研究が注目を浴びにくい要因について憶測を加えておく。第一節に紹介した『縣志』略傳では、戰時下の對日協力とも受け取られる續修事業への參與も記され、同じ『中和月刊』に掲載された甲骨學關係の書評類にも言及されるのに、清學研究論文は言及されなかった。孫の人生を語るさいに清學研究を逸脫あるいは餘計なものと見なすバイアスが（もしかしたら孫自身においても）働いたと見るべきであろう。孫の事情に即してみれば、マイナーな學者の義理の學に注意を向ける非主流的な清學研究は、大量の文獻を參照する必要上、續修提要事業への參畫という條件を利してかろうじて達成されたものであった。その條件が失われたとき、政治社會狀況から見ても繼續困難であり、孫自身にとっても斷念せざるを得なかったテーマとして、忘却の淵に沈められたのではなかろうか。

とはいえ、私にとって彼の清學研究は、まさに忘却への抵抗をこそ中心的モチーフとしていたと見えるのであり、またそれゆえに貴重である。孫は張沐を取り上げた動機について次のように述べる。

吾悲夫起菴、志道之篤、進學之猛、著述之富、而獨爲近世治哲學思想史者所忽視也。故輯其生平論學大旨著于篇。至其是非得失、則以俟學人有所論定焉。

私としては、張沐が道に深く志し、全力で學に取り組み、豐富な著述を殘したにもかかわらず、最近の哲學思想史研究者からは輕視される一方であることを悲しく思う。それゆえ、彼の生平と學問的議論の主旨を集錄して一篇の論文に著した。その學問の是非得失については、學者たちが論定してくれるのを待つこととしよう。（⑦三七～三八頁）

私は、孫海波が張沐に對して志したことを、孫海波の清學研究につ

いて受け繼ごうとしたわけである。

おわりに

まとめよう。孫海波の清學研究は、マイナーな存在を偏愛し、哲學思想的側面に重點を置くもので、先行する錢穆の陰に隠れがちではあるが、論旨や對象選擇において一定の獨自性を評價すべきである。孫の研究の背景には、續修四庫全書總目提要編纂事業における子部儒家類・雜家類の大量の執筆擔當が大きな條件としてあり、一部業績については河南の地緣も作用している。

もちろん、より大きな視野のもとに論ずべき課題は多々殘されており、今後の議論の廣がりに期待したい。とりわけ、續修提要執筆者集團の活動や成果をどのように評價すべきか、その中での比較において各人がどのように特徴づけられるかといった問題は興味深いところである。[53]

注

(1) 鈴木敦「『甲骨文編』における檢索上の障害について」(『五浦論叢　茨城大學五浦美術文化研究所紀要』第一〇號、二〇〇三年)二頁。

(2) 孫海波『甲骨文編』(哈佛燕京學社、一九三四年)。

(3) 中國社會科學院考古研究所編輯『甲骨文編』(中華書局、一九六五年)。

(4) 注(1)前掲論文が代表例。

(5) 存萃學社編集『中國近三百年學術思想論集』(崇文書店、一九七一年)。

(6) 潢川縣志編纂委員會編『潢川縣志』(生活・讀書・新知三聯書店、一九九二年)、六七二～六七三頁。

(7) 郭勝强『河南大學與甲骨學』(河南大學出版社、二〇〇三年)、二二五～二三六頁。郭が孫海波からも授業を受けたことについては、同書、三九七頁を參照。

(8) 私は武藏大學圖書館所藏本により閲覧した。なお、本誌論文執筆要領には反するが、この引用については譯文のみとする。

(9) 孫海波の生年記述は一定しないが、資料の性格上これに從ってよかろう。日本では橋川時雄編纂『中國文化界人物總鑑』(中華法令編印館、一九四〇年[名著普及會、一九八二年覆刻版])、三一五頁により「一九一〇年生まれ」とするものがある。後述のとおり橋川は孫と交流があったが、この書物は突貫工事で作られており、全體としての精度には疑問がある。

(10) 正しくは「說十三月」。注(7)前掲の郭書、二三一頁に商代曆法についての孫海波の研究を論評している。

(11) 原文は「日僞」。

(12) 注(7)前掲の郭書、二三二頁では、『河南大學校史』(河南大學出版社、一九八五年、未見)八五頁引用による學術著作出版物の列擧に『四庫全書金石部分・雜考部分提要考證』とある。後述のとおり、これは獨立の出版物ではなく、續修四庫全書總目提要編纂事業の提要執筆に參加したということだが、擔當部分を「雜物」でなく「雜考」とする點は、相對的により正確である。

(13) 正しくは「岩間德也」であろう。

(14) 開封師範學院で孫海波の同僚であった李白鳳の息女、李惟薇の回想文は、孫の冗談好きの性格や文化大革命時に命がけで藏書を守った姿に觸れる。李惟薇「汴梁舊事」(『駐馬店師專學報(社會科學版)』一九九一年第一期、三〇頁・六七頁)。

(15) 『東亞論叢』は東京・文求堂發行の學術雜誌で第六輯まで出た。中國人による中國語論文の掲載は孫海波の一例のみである。

(16) 『中和月刊』については桑兵「《中和月刊》解說」(中和月刊社編『中和月刊』第一册、北京圖書館出版社、二〇〇七年)、于靜「林辰藏淪陷區期刊——《中和》月刊」(『魯迅研究月刊』、二〇〇七年第五期)を參照。瞿宣穎については田吉「瞿宣穎年譜」(復旦大學博士學位論文、二〇一二年)を參照。

(17) 錢玄同の甥で『萬葉集』の中國語譯を手掛けた。鄒雙雙「「文化漢奸」と呼ばれた男——萬葉集を譯した錢稻孫の生涯」(東方書店、二〇一四年)を參照。

(18) 「淩」字は、引用元が「淩」に作る場合はそれに從う。

(19) 孫海波が生年を「一六一八」と記すのを始め、張沐の生卒年は諸文獻一定しないが、私は沐の子、張煓による記述に從う。林文孝「顏元の佚文一篇——筑波大學附屬圖書館藏『張氏全書』に見る」(『汲古』六六號、二〇一四年)一七頁注(1)を參照。

(20) 現在では同じ版本による影印が顧廷龍等輯『續修四庫全書』(上海古籍出版社)第一四二三册に收錄されている。

(21) 『中和月刊』第一卷第一期「書林偶拾」欄の『漢書疏證』書評(「海波」名義)も清學關係とは言える。同書は北京人文科學研究所所藏の闕名撰の著作を吉川幸次郎・小川環樹・平岡武夫が影印出版したものだが、撰者を杭世駿(一六九六〜一七七三)かとする吉川跋文の推測を、いくつかの傍證から支持している。

(22) 張沐はそれでも徐世昌『清儒學案』(一九三八年序)に「起庵學案」(卷三〇)を立てられるほどの存在ではあるが、楊椿への注目は稀有のことであろう。

(23) 私が利用したのは臺灣商務印書館一九八〇年第七版による影印版(中華書局、一九八四年)だが、參照した限りの範圍は初版と同じ。

(24) 淩廷堪には第十章(四九〇〜五一〇頁)、朱次琦には第十四章(六三九〜六四一頁)、莊存與には第十一章(五二三〜五二五頁)、程瑤田には第八章(三七一〜三七九頁)、王懋竑と朱澤澐には第七章(二八七〜三〇二頁)、劉逢祿には第十一章(五二六〜五二八頁)で觸れる。すべて當該章の脇役的な扱いである。

(25) たとえば①二五九頁、③一二八頁、⑥八九頁。

(26) 一例を擧げれば、戴震・焦循二者の著述と程瑤田『論學小記』を比較した⑤一六二頁の冒頭は、錢の三七一頁とほぼ同一の表現を含み、現代的學術規範では剽竊に當たる。ところが、主張內容はじつは變更されている(程の議論の精粹の處は「亦視兩家無遜色也」とする錢に對し、孫は「又非戴・焦二家之所能及也」とする)。

(27) 張壽安『以禮代理——淩廷堪與清中葉儒學思想之轉變』(中央研究院近代史研究所、一九九四年)、七頁。

(28) 吳仰湘「劉逢祿《春秋》學著述考」(『湖南大學學報(社會科學版)』第二六卷第四期、二〇一二年)、二八頁。

(29) 孫海波は鈔本の殘帙しか見ていなかったが、實は當時『四明叢書』に『石園文集』六卷が收められ(一九三五年張壽鏞序)、後述の續修提要でも『四明叢書』の提要は執筆されている。現在は、孫が見た鈔本と思われる『石園藏稿』もあわせて方祖猷主編『萬斯同全集』(寧波出版社、二〇一三年)第八册に收錄。

(30) 張沐の思想分析はその後、馬淵昌也「清初・張沐の「性是功夫」說とその背景」(『言語・文化・社會』第一五號、二〇一七年)が格段に深化させたが、初期の思想には觸れない。また、傳記研究としては張艷「清代中州理學家張沐生平考」(『天中學刊』第三三卷第六期、二〇一八年)があり、周邊資料から丹念に事績を再構成しているが、孫海波論文や家

譜などの參照がなく、生卒年等を誤る。『張氏家譜』については注(19)前掲林論文で紹介した。

(31) この事業全般に關して、阿部洋『「對支文化事業」の研究――戰前期日中教育文化交流の展開と挫折』(汲古書院、二〇〇四年)、山根幸夫『東方文化事業の歷史――昭和前期における日中文化交流』(汲古書院、二〇〇五年)を參照。

(32) 續修提要事業の推移については、注(31)前掲阿部、山根各書の關連部分、本文後掲『稿本』第一册の羅琳「前言」を參照。

(33) 橋川の著述ならびに周邊資料については、今村與志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』(汲古書院、二〇〇六年)および高田時雄編『橋川時雄民國期の學術界』(臨川書店、二〇一六年)に再錄されたものについてはそれを參照する。橋川と續修提要とのかかわりについてはいくつか論文があるが、本稿で主に利用したものとして、今村與志雄「『續修四庫全書提要』と影印本『文字同盟』第三卷「解題」補遺」(『汲古』第二三號、一九九三年)(以下「補遺」と稱す)のみ擧げておく。

(34) 『編纂資料』の詳細については吳格「東洋文庫藏《續修四庫全書總目提要〉編纂資料》校讀記」(『三島中洲研究』第二卷、二松學舍大學二一世紀ＣＯＥプログラム事務局、二〇〇七年)(以下「校讀記」と稱す)を參照。私は二〇一四年四月一四日に資料を閲覽し、孫海波關係部分のみ寫眞複寫を入手した。

(35) 注(31)前掲の阿部書、七四六頁、山根書、五一頁。

(36) 今村與志雄編「橋川時雄年譜」(注(33)前掲今村編書所收)五二九頁、一九三八年の項に「春、『續修四庫全書總目提要』、原稿執筆者は二〇人あまりの、若い學者たちが增聘され、執筆の仕事に參加」とある。また、「橋川時雄回想錄〔その二〕」では橋川自ら事情を語っている(同書、三五七頁)。

(37) 注(31)前掲阿部書、七四六頁、山根書、五一頁。

(38) 注(33)前掲今村「補遺」七一～七七、八三頁。

(39) 『中和月刊』第一卷第二期には、「詢」名義の『使華訪古錄』書評が載せられているが(影印本第一册三四六～七頁)、『稿本』一二―二〇七頁の孫海波提要とほぼ同文である。「波」の草書體が判讀できず誤植されたものと思われる。

(40) 自著の提要も勝手に書かれたものではあり得ず、たとえば『魏三字石經集錄』(『稿本』一二―三九六頁)は割當記錄も受理記錄もある(『編纂資料』書目、孫海波第一册一丁ウ、『同』研究所、孫海波一丁ウ。なお、丁付けは簿册自體にはなく、記載範圍を對象に私に付した。以下同樣)。吳格が指摘するとおり、「書目」には「近人不錄」として抹消されるケースが散見されるが(注(34)前掲「校讀記」五六頁)、新知見の急增していた甲骨學や金石學はこの原則の適用外なのであろう。孫海波自著も特例扱いと想像される。

(41) 張沐の最重要資料『遡流史學鈔』については、『四庫全書總目提要』卷九七に「儒家類存目」としてすでに提要がある。

(42) 「研究所」簿册內には記述の終わりに「右甲骨類六十一部、一百九十四卷」と記すが、實際の狀況は本文のとおりである。注(34)前掲吳格「校讀記」三五頁を參照。

(43) 注(34)前掲吳格「校讀記」は「通知止撰」の例を示すが(五六頁)、「已撰」印がありながら他の執筆者が執筆濟みで取り消されたのも一二例ほどある。

(44) 油印打字本については、注(33)前掲今村「補遺」八一頁を參照。

(45) たとえば、本文でも後述するとおり「儒家・雜家」という大雜把な分類が「書目」第二册四丁ウの二行目に登場し、八丁オ一〇行目『尙書攷異』からは明らかに經部の書が續くのに、もはや部類欄は修正されな

い。ここでは八丁オ一〇行以下は未分類として扱った。

(46) 注(36)前掲「橋川時雄年譜」、五三二頁。また、同注前掲「橋川時雄回想錄〔その二〕」の書き入れ本による注記（三九六頁）も參照。

(47) 以上に加えて、「書目」記載のない執筆例が執筆者不明範圍に存在することもあり得る。たとえば、丁麟年『栁林館吉金圖識』（『稿本』三七―一五九頁）は、書物に付せられた孫海波の一九四一年刊識と表現が一致し、筆跡の特徴も一致することから、孫の提要稿と判斷できる。

(48) この範圍の途中、顏元『禮文手鈔』の部類欄は「禮」と記すが（第一冊三四丁オ五行目）、これ以後李**塨**『平書訂』等の顏李叢書本が連續するので、儒家類内での孤立例と考えられる。

(49) 注(34)前掲吳格「校讀記」によれば、「書目」に比べて提要稿の部類や數量が增加している執筆者は相當數いる。ただ、孫海波については「書目」での割當・不足篇數の記述と實際の擔當部類・篇數とがほぼ釣り合っているとするが（四九頁）、實際には書目外の追加割當分を執筆した關係で相殺された結果も含まれる。

(50) 孫海波執筆の提要稿は、おおむね書物の内容を的確に踏まえて簡潔な特徴指摘を行っているものといえる。もっとも、彼の提要はほとんどが二枚目の數行で終わっており、稿料が枚數計算であるならばかなり效率的な書き方ではある。

(51) ただし、孫海波は李經世『尋樂集』一卷の提要を執筆しており（『稿本』一一―五三一頁）、『編纂資料』書目でも割當が確認できる（第二冊五丁オ）。「張起菴學記」が發表された一九四〇年以後の執筆ということになろう。

(52) 一九四二年出版の『河南通志稿』（國立國會圖書館オンラインで閲覽可能）では、「藝文志」經部・子部に張沐の著作解題も數種類收錄されており、その編纂過程で孫に何らかの刺激を與えた可能性も考えられる。

(53) 孫海波らを、「果して提要執筆の適任者であったか否かはわからない」（注(31)前掲、山根書、五三頁）とし、若手研究者の單なるアルバイト動員と見る向きもあるが、本當にそのような概括的評價が妥當なのかどうかは再檢討の必要があろう。個々の著者と執筆提要を檢討した事例としては、孫楷第（一九〇二～一九八六）について林雅清「『續修四庫全書總目提要』の價値――『水滸傳』の解題を例に――」（『關西大學中國文學會紀要』二八號、二〇〇七年）があるほか、張壽林については著作集に提要稿が收錄され、楊晉龍の「校訂跋」が學術史的評價の方法論を含めて論じている（楊晉龍校訂『張壽林著作集――續修四庫提要稿（四）集部』、中央研究院中國文哲研究所、二〇〇九年）。こうした研究にとっての條件は、復旦大學の吳格教授を中心に、稿本も油印本もあわせた續修提要の總合的整理が進められていることでさらに整いつつある。既刊の叢書部はほとんど謝國楨の獨擅場である。吳格・眭駿整理『續修四庫全書總目提要・叢書部』（國家圖書館出版社、二〇一〇年）を參照。

〔付記〕

本論文はJSPS科研費JP16K02160（研究代表者：恩田裕正）の助成による研究成果の一部である。また、當初の着想を得るにいたった研究休暇（二〇一三年度秋學期～一四年度春學期）の取得について立教大學文學部に、『續修四庫全書總目提要撰稿底簿』（『編纂資料』）の閲覽と寫眞複寫について公益財團法人東洋文庫に、それぞれ感謝の意を表する。